前書き

昨今、教育現場で教えられている内容が大きく変わろうとしています。具体的には、これまでの、知識暗記型の教育から、知識活用型の教育へとかじ取りが行われ、自ら問いを立て、自律的に考えることのできる人材を育成することが求められています。

これまでに、授業における教師の発問について解説した本や、児童・生徒の質問スキルについて書かれた本がいくつか出版されています、しかし、理論的背景と教育実践の両方が１つの本に収まったものは実はあまり多くはありません。理論に偏りすぎており、実際の授業で具体的に何をしたらよいのか分からない本や、実践の紹介が主で理論の紹介がないため表面的にしか理解が進まない本もあります。そこで、本書は１つの本の中で理論と実践の両方を扱うことにしました。

第１部　問いに関する主な理論や歴史的背景

本書の第１部では、理論や歴史を中心に「問い」に関する実践を４つ紹介しています。

「第１章　質問研究の意義」では、章の前半で、「質問は分かった時に初めて生まれるものであること」や、「社会的相互作用の中でいかに「質問」が引き出されるか」について解説しています。章の後半では、「問いが生成されるメカニズム」について解説した後、「教師誘導型」(教師が児童生徒を誘導して問いを持たせる)と、「自由生成型」(児童生徒が自由に問いを生成する)の２つの実践を紹介しています。そして、章の最後では、「これからの質問の実践研究に向けて」と題し、「教師等学びの場をデザインする人自身が自ら仮説を構築し、それを実践して結果を検証し、自らの現場に役立つ理

論を構築していくこと」を提案しています。

「第 2 章　予習での問いをもとに授業理解を深める」は、「予習における質問生成」ついて興味のある方におすすめの章です。この章では、まず、「物事の意味を理解しようとする志向が低い学習者」に「なぜ」質問を生成するよう指導しても形式的に「なぜ」をつけるだけの表面的な問いになってしまうことを報告しています。さらに、その対策として、予習の中で設定された問いに対して「解答を作成させること」、自分の解答に対する「自信度を評定させること」を行うと、学習者の注意が「問いに関連する情報に向くようになる」ことを報告しています。

「第 3 章　環境が授業における学習者の質問を引き出す」では、冒頭で「学習者はなぜ質問をしないのか」と問いを立て、「教室で質問がなかなか出ない原因」を分析しています。そして、「質問づくり」を促す介入の仕方や、「教室で質問を引き出す方法」について具体的な事例を用いて解説しています。さらに、「質問を思いつくか否かに学級間差があるか」を「教室の目標構造」等の観点から分析しています。

「第 4 章　児童の問いに基づいた小学校道徳授業の展開―木下竹次と手塚岸衛の大正自由教育の実践を踏まえて」の前半では、大正時代に「児童の問い」を中心にした教育を行った、木下竹次と手塚岸衛の実践を当時の資料を元に紹介しています。後半では、「泣いた赤おに」を題材に筆者らが行った、「児童の問いに基づく授業」の手順の詳細な説明と、その結果について述べています。小学校で、児童の問いに基づいた授業を行ってみたい方にぜひ読んでいただきたい章です。

学習者の「問い」は 2 つに分類できる

本書では学習において生まれる「問い」を、「知識・技能の習得」において生まれる「問い」と、「探究に関わる学習」において生まれる「問い」の 2 つに分けています。

第２部　「知識・技能の習得」における「問い」

「知識・技能の習得」において生まれる「問い」に関しては以下の３つの章が対応しています。

「第５章　批判的思考としての質問を重視した授業づくり」では、前半において「質問」と「批判的思考教育」の関係について解説しています。そして、後半では、この章の筆者が行った、「質問生成を通して批判的思考を育成する実践」を２つ紹介しています。１つ目は、教科書を予習した際の疑問点を学生に書いてもらい、さらに講義の最後に質問を作ってもらう実践、２つ目は、受講生によって構成された発表グループが講義テーマに関連した発表を行い、それに対して聞き手のグループが質問を生成し、質疑応答を行う実践です。それぞれの実践について工夫した点、実践の振り返りが丁寧に記されています。

「第６章　学習で生まれる問い、学習を進める問い―協調問題解決をとおした問いの創発」では、学習者が自ら問いを見出すことを指導者が助ける、「問いの創発の支援」に着目しています。そして、学校外の科学教室において、協調問題解決活動を柱とした授業をデザインし、実践を行い、問いの発見・創発の実態を調べました。その結果、「教師が課題を提示し、解決させる」という、一見、問いの創発と矛盾するような授業において、児童生徒が「主題に関する理解を深めると共に、次の学びにつながる問いを自分たちで見出すことができた」ことを報告しています。

「第７章　授業後の質問作成を通したアクティブラーニング―留学生を対象とした実践とその改善」では日本語・日本文化を専攻する留学生を対象に、「歴史」の授業の中で、筆者が試行錯誤を重ねながら、学生に質問を生成してもらう実践に取り組んでいる様子が記されています。「何回目の授業でどのような指導を行ったか」が詳細に書かれており、日本人を対象にした質問生成の実践にも応用可能な、読み応えのある内容となっています。

第 3 部 「探究に関わる学習」における「問い」

「探究に関わる学習」において生まれる「問い」に関しては、3 つの章が含まれています。

「第 8 章　問いに基づく探究的な学習とその実践」では、「探究に関わる学習」の中でも特に「課題設定」にフォーカスをあて、「問いを立てたり、問いを明確にしたりする過程を支援する実践事例」について解説しています。また、筆者が公立小学校の教諭と「自由研究の質を高める」ことを目的に夏休み前に行った 2 時間の特別授業の内容が、実際に使用したワークシートと共に詳細に解説してあります。そのため、小学校で「問い」に基づいた探究的な学習を実践したい方に役立つ内容となっています。

「第 9 章　大学での卒論・修論指導時における「問い」の役割」では、まず、前半で、大学における「初年次教育とアカデミックライティングの関係」や、「21 世紀型能力と「問い」の関係」等について述べています。後半では、卒論・修論指導において「問いの型(テンプレート)を用いた「アカデミックライティング」の指導」の仕方を解説しています。探究学習における「問い」に興味のある方におすすめの章です。

「第 10 章　学会で質疑応答できる力を育成し評価する」では、内科医である筆者が、医学生が学会で「質問」するための 3 段階の指導法を提案しています。第 1 段階は学内の発表会における「質問振り返り表」の活用、第 2 段階は「質問評価表」の作成による質問の質評価、第 3 段階が「質問振り返り表」と「質問評価表」を用いた学会における実践です。また、筆者が開発した「質問振り返り表」や「質問評価表」といったツールを具体的に紹介しており、学会における質問力の育成はもちろん、職場や学校といった場面での質問力育成にも応用できる充実した内容となっています。

第 4 部　教師の「発問」について

本書では、教育において、教師の「発問」も学習者の「問う力」の育成に

おいて重要であると考え、「第４部　教師の「発問」について」には、４つの章を含めました。

「第 11 章　「学習者のつまずき」をもとに設計する国語授業―「深い学び」を促す教師の発問」では、「学習者のつまずきを踏まえながら授業の流れや発問を考えること」を提案しています。また、「なぜ」や「そもそも」といったことを自ら説明できる児童生徒の育成についても触れています。さらに、「コツを知り、体験し、自分の特徴を知るための発問」や「自分の考え方や生活と結びつけることを促す発問」、「自分自身の言葉で内容を分かりやすく説明することを促す発問」について、小学校国語を素材に具体的に提案しています。「ごんぎつね」、「わらぐつの中の神様」といった、著名な題材も取り上げられており、実践に役立つ内容となっています。

「第 12 章　わからないことがわかるための問い―授業補助者から授業者へ」は、「分かる」とは何か、「問う」と「尋ねる」の違い等、語の定義の違いから「問う」ことについて改めて考えることのできる章です。答えのない問いが遍在する人生を生きていくために、問いを考えていくことの有益さについて述べています。また、「誰に何を何のために問うのか」という観点から「問い」を分類して解説しています、さらに、正統派の「問い」と対比する形で、今まで学んだ事に基づいて、その科目の範疇を超えて「考える」ことを目的にした「問うてみた」という、新たな「問い方」を提唱しています。

「第 13 章　考えることが楽しくなる発問」において、小学校と中学校の元教員である筆者は、教師の発問は主体的、対話的で教科書を超えた深い学びへと子供を誘うと考え、発問を「子供の問いを教師の発言という形で代弁した発問」、「知識活用に関する発問」、「認知的な矛盾や見逃し等を顕在化させる発問」の３つに分け解説しています。さらに、「発問で育つ資質・能力」について解説した上で、「発問作成の視点」と共に、「発問の具体例」を多く示しており、小学校と中学校における実践にとても役立つ内容となっています。

「第 14 章　児童の気づきを自らの問いに変える英語の授業デザイン」は、小学校の英語教育において「問い」をいかに指導に生かすかに着目した章で

す。児童が生み出す「問い」を基に、「思考力・判断力・表現力」を涵養するための実践を紹介しています。外国語活動のプロジェクト型学習（Project-based learning: PBL）として、「ネームプレートを作るというアクティビティ」を通した実践についての解説があります。また、他教科連携の例として、内容言語統合型学習（Content and language integrated learning: CLIL）として、「コンピュータープログラムを通した英語活動」の中で、児童の問いがどのように生まれ、それをどう指導に生かしていくかについて書かれています。問いに基づいた英語の授業をどのように展開したらよいかお悩みの方におすすめです。

第５部　「問い」の理論と実践の整理

「終章　質問実践の意義と方法―本書各章からの示唆」では、学習者が問いを発することに関して、why（なぜ）、when（いつ）、how（どのように）、what（なに）という４つの観点から、この本に載っている章を整理しています。特に「学習者の問い」にフォーカスをあてているため、「学習者に問いを作ってもらうにはどうしたらよいか」、「学習者の問いを授業の中でどう生かしたらよいのか」等に興味がある方は、この章から読まれると各章の概要とつながりが把握できます。

コラムについて

実際の教育現場で「質問」や「問い」を活用した実践がどのように行われているかが分かるように、本書には現職の小学校、中学校、大学の教員が執筆した５つのコラムが含まれています。

「コラム１　児童の問いを元にした道徳授業の展開」のコラムでは、第４章の著者でもある筆者が、「児童の問いを元にした授業」に込めた思いや、児童の問いを元にすることで「予想外の展開」となった時には、「教師の思考を児童が超えたということであるのだから、達成できなかったねらいについ

ては別日に再度、取り上げることで担保すればよい」等、実践上の問題への解決策として、実際に「児童の問いを元にした授業」を実践した著者が感じた課題について書いています。

「コラム２　沖縄県「問いが生まれる授業」」では、児童に「問い」を持ってもらうことは「難しく考える必要はない」と述べ、小学校の校長先生がいくつかの実践例を紹介しています。例えば、友達の考えや作品、作者の主張などに対して評価をする場面で「私ならこうする」と感じたとき、「なぜこうしなかったのだろう」「なぜそうしたんだろう」と、問いが生まれる。根拠を考えることは、「どうして～といえるのか？」と問いを発することにつながると述べています。

「コラム３　生徒の問いに基づいた授業における教師の学び」では、中学校の技術科を担当する筆者が、「ペットボトル水稲栽培」の実践の中で、土の配合や肥料の量を生徒自身に検討させた実践について解説しています。その結果、上手く生育しない生徒だけでなく、稲が順調に育った生徒もなぜうまくいったのかが分からず悩み、両者の間に対話が生まれました。そこで、筆者は「学習者の「問い」は、自身の持つ理論では解決できない課題と出会うことから始まることに気が付いた」と記しています。さらにコラムには、筆者のユニークな実践である、生徒が考え問いを生みだす「ちばふ工場の改善計画」の実践について、授業に参加した生徒の感想文と共に、書かれています。

「コラム４　問いを活かした授業」では、共編者である道田が小学校の授業を紹介しています。その授業では、図形の問題を、小グループで児童に考えさせていました。そこでは、どのように考えて立式して答えを出すかの説明を小グループで考え、黒板に考えを書かせていました。その際に、先生からの「ある一言」により、「児童が疑問を出す機会が保証され」、児童から問いが出て深まる授業となりました。教員の指導の工夫により、「問いを活かした授業」が可能になることが伝わってくるコラムです。

「コラム５　授業において問い続ける生徒を育てる仕掛けづくり」のコラムでは、「単元冒頭で実験をしたり、現象やモノを見せたり、日常経験を想起させたうえで、「単元を貫く大きな課題を教員から投げかける」ことで、生徒の問いを引きだすことができることを述べています。また、「知識構成型ジグソー学習」、「1 枚ポートフォリオ」、「問いを発しても許される文化づくり」等、明日の授業からでもすぐに取り入れることができる実践例が満載で、理解以外の科目を教える教員にも参考になる内容となっています。

この本は、「問い」の研究している研究者や大学院生、教育現場で教えている方を読者として想定しています。そのため、本書では学校場面に特化して、質問の理論と実践について解説しました。本書が「問い」を中心とした実践の普及に貢献できましたら幸いです。

編者代表　小山義徳

目　次

前書き　iii

第１部　問いに関する主な理論や歴史的背景

第１章　質問研究の意義
白水始・小山義徳　3

1. はじめに　3
2. 学びにおける質問の意味　4
3. 問いの生成に関する教育心理学の研究の概観と教育実践　8
4. これからの質問の実践研究に向けて　17

第２章　予習での問いをもとに授業理解を深める
篠ヶ谷圭太　23

1. 予習時の質問生成に着目した背景　23
2. 問題の意識化を促す介入　29
3. 問いの生成手順への介入　32
4. おわりに　37

第３章　環境が授業における学習者の質問を引き出す
生田淳一　41

1. 学習者は質問をしない　42

2. 教室で質問を引き出すには 46
3. 今後の展望―質問力の育成のために必要なこと 53

第 4 章　児童の問いに基づいた小学校道徳授業の展開
―木下竹次と手塚岸衛の大正自由教育の実践を踏まえて
小山義徳・八木橋朋子 59

1. 児童、生徒の問いを元にした教育実践の歴史 59
2. 千葉県師範学校附属小学校（現：千葉大学附属小学校）の実践 68
3. 児童の問いに基づく道徳授業の実践 71
4. 児童の問いに基づく授業を行うにはどのような指導が必要か 76

コラム 1　児童の問いを元にした道徳授業の展開
千葉大学教育学部附属小学校　八木橋朋子 79

第 2 部 「知識・技能の習得」における「問い」

第 5 章　批判的思考としての質問を重視した授業づくり
道田泰司 83

1. はじめに 83
2. 批判的思考を育成するための質問技法（questioning） 84
3. 筆者の実践 1―宿題を通した質問作成 86
4. 実践 1 の振り返りとその後の模索 88
5. 実践 2 の構想と模索 90
6. 実践 2―受講生の発表と質疑応答 93
7. 終わりに 99

第 6 章　学習で生まれる問い、学習を進める問い
—協調問題解決をとおした問いの創発　**齊藤萌木**　103

1. はじめに　103
2. 人はいかに学ぶか—実践研究の前提　105
3. 授業のデザイン・実践・振り返りによる実践研究の進め方　107
4. どんな実践事例を対象にしたか　109
5. 理解の深まりと問いの発見の関係—実践事例の分析とその考察　111
6. 次の学びにつながる「問い」の創発をどう支えるか　118

第 7 章　授業後の質問作成を通したアクティブラーニング
—留学生を対象とした実践とその改善　**小山悟**　123

1. 本実践の目的と背景　123
2. 初期の実践について　125
3. 何をどう改善したのか　130
4. 現在の実践について　133
5. 学生の書いた質問　136
6. 実践をふりかえって　139

コラム 2　沖縄県「問いが生まれる授業」
沖縄県教育庁義務教育課長　目取真康司　143

第 3 部 「探究に関わる学習」における「問い」

第 8 章　問いに基づく探究的な学習とその実践
深谷達史　147

1. はじめに　147
2. 探究に関する理論や研究　150

3. 問いに焦点をあてた実践例 153
4. 本章のまとめと展望 161

第 9 章　大学での卒論・修論指導時における「問い」の役割

野崎浩成 167

1. はじめに―ここでいう「問い」について考える前に 167
2. 大学での初年次教育・リメディアル教育の実施状況
―今、大学で行われている初年次教育・リメディアル教育とは何か 168
3. 初年次教育と「アカデミックライティング」の位置づけ 168
4. 伝統的な作文教育と「アカデミックライティング」との関係 169
5. 21 世紀型能力と「問い」「アカデミックライティング」との関係 170
6. 愛知教育大学情報科学コースにおける教育実践事例 172
7. 本教育実践（第 6 節）と「問い」の関係
―本教育実践の中での「問い」について改めて考える 181
8. まとめと今後の課題―未来を担う学生のために 184

第 10 章　学会で質疑応答できる力を育成し評価する

亀岡淳一 187

1. はじめに 187
2. 質問力向上の教育の意義 188
3. 第 1 段階：学内の発表会における質問振り返り表の活用 189
4. 第 2 段階：質問評価表の作成による質問の質評価の試み 191
5. 第 3 段階：質問振り返り表と質問評価表を用いた学会による実践 195
6. 質問発信力の育成 196
7. アウトカム評価 197
8. おわりに 198

コラム 3　生徒の問いに基づいた授業における教師の学び
千葉大学教育学部附属中学校　桐島俊　200

第 4 部　教師の「発問」について

第 11 章　「学習者のつまずき」をもとに設計する国語授業
—「深い学び」を促す教師の発問　**植阪友理**　205

1.「深い理解」を促す教師の発問の必要性　205
2. 学習者のつまずきから考える授業設計（困難度査定）を生かした発問　206
3. コツを知り、体験し、自分の特徴を知るための発問　210
4. コツを知り、体験し、自分を知る発問は、文学作品でも有効か？　214
5. 自分の考え方や生活と結びつけることを促す発問　219
6. 自分自身の言葉で内容を分かりやすく説明することを促す発問　224
7. 結びにかえて　227

第 12 章　わからないことがわかるための問い
—授業補助者から授業者へ　**たなかよしこ**　231

1.「わかる」と答える大学生の気持ち　231
2.「わからないこと」「できないこと」をどう捉えるか　233
3. 誰に何を何のために問うのか　236
4.「問い」にまつわる日本語の難しさ　238
5. 大学での「問い方」への提案　242
6. 授業での評価決定と授業補助者からの視点の変化　258
7. おわりに　263

第 13 章　考えることが楽しくなる発問

鏑木良夫　267

1. はじめに　267
2. 子供の問いは教師の発問　267
3. 発問の 3 つの形　268
4. 発問で育つ資質・能力　271
5. 発問作成の視点　274
6. 発問の具体と分類　275
7. おわりに　289

第 14 章　児童の気づきを自らの問いに変える英語の授業デザイン

中山晃　293

1. はじめに　293
2. 活動と教科　294
3. 指導　298
4.「思考力・判断力・表現力」に結びつく児童の「問い」　306
5. 結語　307

コラム 4　問いを活かした授業　道田泰司　310

第 5 部　「問い」の理論と実践の整理

終章　質問実践の意義と方法

―本書各章からの示唆　道田泰司　313

1. はじめに　313
2. なぜ？　314
3. いつ？―授業の中での問い生成の位置づけ　320

4. どのように？ 323
5. なに？―質問の種類 325
6. 終わりに 327

コラム５　授業において問い続ける生徒を育てる仕掛けづくり　道田泰司　330

索引 333
執筆者紹介 337